

多文化共学短期受入れ留学プログラム 2017 (京都サマープログラム 2017)

リー・シューエン

2017年7月31日－8月10日

この多文化共学のサマープログラムに参加して、多民族の留学生や京大生と一緒に二週間を過ごし、非常に勉強になりました。プログラムでは、日本語の勉強と他の国の留学生との言語交換だけではなく、日本の多くの側面、すなわち農学的、文学的、歴史的、政治的、教育的な側面に対する理解を深めることができました。

まず、毎日の日本語の授業で、昭和時代のアニメ「サザエさん」とサイレント映画の「腰辨頑張れ」を通じ、日本語の役割語や聞き取りについて勉強しました。この興味深い方法により、もう一度、勉強を始めた頃のように日本語の学習に興味がわいてきました。日本語の授業以外にも、留学生や京大生と交流した時、自然な日本語について学びました。このプログラムを通して、自分が分かっていないことが多いということを実感しました。そのため、ここからまた日本語の勉強の続きを改めて再開したいと思っています。

次に、講義の聴講では、日本の多くの側面について理解しやすい形で勉強することができました。例えば、農学部の科学講義で、最新の日本での研究を素人向けに説明してもらいました。この科学講義で、農学の倫理的な問題や研究上での解決方法を学びました。例えば、もし卵が孵る時間をコントロール出来れば、早く孵ったひよここと遅くて孵ったひよこの優劣を評価する必要がなくなります。実は、農学の技術と自分の専門（経済学と哲学）とは関係ないと思っていたのですが、この講義で、倫理的・道徳的な面を紹介していただき、農学などの科学と文学が繋がっている事実に気付きました。そして、近藤先生は未来の次世代のため、持続可能な食料生産をするための態度も表明され、感動しました。

また、湯川先生の文学講義の内容は私がいつも勉強したかったものでした。このプログラムのおかげで、日本人の考え方や価値観について少し分かるようになりました。例えば、日本人は完璧ではない物を好むということを知りました。この考えには、プログラムで学外を見学した時にも触れました。例えば、京都仙洞御所で、茶室の丸い窓口は完璧な丸ではなく、外の景色を想像できるようにするために、窓口の下の方を水平にしてありました。更に、自然に敏感な昔の日本人々が花鳥風月を重んじていたことも、自分が習っている箏と日本の音楽に見ることができます。そのため、講義を受けた後、自分の大学でも日本の文学を勉強することを決めました。

次に、北山先生がご担当なさった書道の授業で、日本の文化や漢字のおもしろさについて学びました。漢字の源、変化、甲骨文に興味を抱きました。私は中国語が分かるので、日本語を学ぶ時に、漢字の勉強をあまり真面目にしてきませんでした。しかし、この授業で、字の書き方や字の形など、漢字の全ての面に深い意味が秘められていることに気付きました。プログラムの後も、漢字の勉強をしっかりとしたいと思います。

言語交換と共同発表会では、他の留学生および京大生と交流する機会が多くありました。発表準備は少し大変でしたが、他の国の宗教的・文化的側面の理解が深まりました。私達は各国の正月を比較して、非常に多くの共通点を見出しました。特に、どこの国でも強い家族意識が存在することが分かりました。そして、近代化の影響で正月の過ごし方が変わるものの、家族のつながりは強く残っていることも分かりました。また、お正月の回数も国によって異なるのは、民族や文化が反映されているということにも気付きました。

最後に、京大生サポーターのおかげで、京都大学の経験は非常に楽しいものになりました。出身が京都ではない京大生でも、京都の歴史と宗教的な習慣についても深く知っていました。それを丁寧に説明してくれて、本当にありがとうございました。私達がいつもお世話になっていましたが、京大生のおもてなしはまさに日本人のおもてなしの手本でした。